

## はじめて一年生を教える

学校で一年生を受け持ち、帰宅しては一年生のわが子と語る……。  
これなら、一年生を受け持った経験のないわたしにも、なんとか人さまの子どもをあずかって、教育することもできるのではないか、という考えでした。たしかに、これはよい考えだったと思っています。たいしたまちがいもしでかさずに、まがりなりにもつとめて、子どもたちの両親から感謝されるくらいに子どもたちを教育し、三年生を終えるまで受け持つことができたのは、なによりもこのおかげではなかったかと思っています。

しかし、それにしても、一年生を受け持つということは、なんとたいへんな仕事でしょう。五十人が五十人、みなちがった性格をもっている子どもたちが、それぞれちがった行動を思い思いに始めると、さあたいへん、これをどう扱ったらいいのやら、最初の一週間というものは、まったくとほうにくれたものでした。

そのうえ、学校が戦災にあい、教室が足りないために二部授業をする、という不利もあって、午後から勉強を始める日など、遊びつか

れてから学校にやって来る子どもたちを教えることは、なかなかたいへんなことでした。

しかし、それでも、五月、六月と、月日のたつにつれて、子どもたちも成長して扱いよくなり、わたしも指導のこつがわかって、学習もすらすらと進むようになりました。

## 文部省の目標の七倍に成功

わたしは、はじめ、一年生を終えるまでに、およそ 200 字の漢字を教えて、そのうち、150 字ぐらい覚えさせたい、と考えていました。

ところが、二学期の終わりから三学期にかけて、子どもたちの学習はとんとん拍子に進みましたので、はじめの予想を大きく上まわって、教えた漢字は 300 字を越え、覚えた漢字も、200 字を越えてしまいました。

いちばんよかった子は、教えた漢字 327 字のうち 305 字を覚え、いちばん悪かった子でも、63 字覚えました。クラスの平均は 203 字。

つまり、文部省の目標である 30 字の、およそ七倍に近い漢字を覚

えたわけです。なによりもうれしかったことは、いちばん成績の悪かった子どもでも、文部省の目標の二倍を越えていたことです。

この子どもたちが三年生になったときには、子どもたちの使っているノートや作文を見た先生たちは、異口同音に、「六年生もとてもありません」といって、ほめてくれるほどになりました。

### あらゆる実験をこころみる

このすばらしい結果は、「漢字がやさしい文字であること」少なくとも、「一年生にとって、漢字はむずかしい文字ではないこと」を証明したものであり、「歩け」式指導方式が正しかったために、このよい成績が得られたことを、わたしは確信することができました。

わたしは、自分が正規の小学校教師としての教育を受けておらず、そのため、指導技術も未熟であることを、十分に自覚していました。だから、ふつうの先生がたが、このやり方で教えたら、もっともっとすばらしい成績が得られるだろうと、確信していました。

ところが、先生がたはそうは考えてくれなかったのです。

「元指導主事の石井先生がやったから、成績がよかったのだ。一般にだれでもやれるという方法ではないのだ」

こういう声が、わたしの耳に聞こえてくるのです。しかも、こういう批評があまりにも強かったので、ついわたしも、「自分の指導技術はうまいのかもしれない」などというぬぼれ心も出てきて、「このすばらしい成績が、すべて、『歩け』式指導方式による結果である」

といい切る自信が、すこしくらついてきました。

「よし、もう一度一年生から、今度は、『あるけ』式指導方式でやってみよう。そうすれば、『歩け』式と『あるけ』式と、どちらがどれだけすぐれているかが、はっきりとわかるだろう。そこまでたしかめてみなければ、実験としては不完全なものだ」

こう考えたわたしは、ふたたび一年生を受け持とうと決心しました。